

日本学の始祖の知られざる人生

# セルゲイ・エリセーエフ

20世紀初頭から日本を研究し、日本文化を海外へ紹介することに尽くしたセルゲイ・エリセーエフ。本格的な日本学の始祖と言われているエリセーエフは、第2次世界大戦で日本の文化遺産を残すように努めたという伝説を残す。そんなエリセーエフの人生について、義娘であり、中国が専門の歴史学者、ダニエル・エリセーエフに話を伺い、知られざる歴史の裏をたどっていく。(取材・文：沖島崇)

東京で学んでいたときのセルゲイ (1911年)



## 夏目漱石の 木曜会にも出席

明治時代に撮影された、はかま姿の外国人の写真。この人物こそセルゲイ・エリセーエフ(フランスに帰化後は名前を「セルジュ」に変更)。1889年、ロシアの高級食料品店「エリセーエフ商会」の次男として、サンクト・ペテルブルクで誕生した。1908年、東京大学に初の正規外国人として入学。在学中は古典文学、近代文学、日本舞踊、風俗習慣まで徹底的に学び、夏目漱石の木曜会にも出席した。

ところで、エリセーエフが日本に来る数年前に日露戦争(1904-05)が起きている。自分の国を倒した日本に、エリセーエフはなぜ興味を持ったのだろうか?

「セルジュが私に話したことが事実だとしたら、アジアの小国が、どうやって強くなったのかというのを知りたいと思ったからです。実は日露戦争の前に、セルジュには忘れられない出来事がありました。ある日、セルジュの母のところへ、ロシア海軍兵だった代父がやってきました。そこで、「これから日本と戦うために、バルチック艦隊で戦地へ向かうが、日英同盟を組んでいる英国領の港は通れないので、マダガスカルを通る長旅になる。旅の途中で病気で亡くなる人も出るだろうし、食料不足で力が尽きているだろうから、この戦いには勝てるはずがない。自分は生きて帰れない」と話したそうです。そして最後に、セルジュの母親に向かって「adieu」と言ったそうです。「au revoir」ではなく……。セルジュは1年後、彼が亡くなったことを知ります。世界中が驚いた日露戦争での日本の勝利でしたが、セルジュも同様、とてもショックを受けたようです。そして「この強い小国日本へ行きたい」と母親に言ったそうです」(ダニエル談)

まだ正規の外国人学生がいなかった東京大学に入学するには、あれこれと苦勞をしたものの、08年、見事に入学を許される。ロシアの大金持ち、エリセーエフは、庭付きの純日本式の家を借り、世話をしてくれる女中を数人置いていたという。

「戦後、私はセルジュが20世紀初頭に日本に滞在していたときのことを知っている日本の教授にお会いしたことがあるのですが、「セルジュは大名のような屋敷に住

んでいたよ」と言っておられました。セルジュの家に遊びに行くと、教授ですら普段食べられないようなものが食べられたそうですから。日本のとても美しい家に住んでいたのかもしれませんが、彼にとっては、その家は質素に映ったのではないのでしょうか」(ダニエル談)

それもそのはず、下記写真を見ての通り、ロシアでは宮殿のような家で生活していたエリセーエフ。



エリセーエフの邸宅が写されたアルバムより

「1900年代初めの方に父親に買ってもらったバイクを、セルジュは家の邸下で乗り回していたというから、どれだけ裕福で、どれだけ家が広いか、お分かりでしょう? それも、この家だけではなく、複数の邸宅を所有していました。夏にはフランスへバカンスに出かけたのですが、ロシアからフランスまで、電車を借り切って、家具も全部持って行ったそうです。当時の裕福な家庭ではそういうことをしたもなのですよ」(ダニエル談)

日本滞在中の話はあまりしなかったというが、「そういえば誰にもまだ話したことがなかったわ」と思い出したように、セルジュの日本での思い出話を語ってくれた。

「日本でセルジュは、先生との関係を築くのが難しかったそうです。例えば当時、日本では生徒が先生の手伝いをするのは当然でした。でもセルジュは誰かのために何かをするという生活をしたことがなかったので、全く慣れていませんでした。ある日、飲み会で先生が酔いつぶれて、畳の上に転がってばかげたことをしていたそうです。セルジュは大変なことになったと思い、先生の妻の元へ送り届けようと、先生の自宅まで負ぶって連れて帰りました。セルジュは、かわいそうな先生の面倒をしっかりと見てもらおうと、先生の妻や女中を全員起こして事態を知らせたそうです。セルジュ自身はとてもいい行動をしたと思っていたのですが、次の日、大学で皆の態

度が冷たい。そこで他の生徒に自分が何かしたかと尋ねたところ、「先生の面目丸つぶれだ!」と言われてびっくり。「誰にも気が付かれないように門の前にそと先生を置いていけばよかった。酔いが冷めたら先生は自力で家の中に入るんだから」と言われたそうです。さらに、償うためには「あなたが同じ恥をかかなくて」と言われ、今度はセルジュが酔いつぶれ、先生に運ばれ、女中たちの前で恥をかいたそうですよ」(ダニエル談)

## 身包みはがされた ロシア革命

そんな日本の「常識」も学びながら、エリセーエフは芭蕉研究を卒業論文とし、14年に大学院課程を修了する。ロシアへ帰国後に結婚をし、2年後には研究のために日本を再び訪れる。その日本で、ロシア革命の動きを知る。

「私の夫のヴァティムが、当時セルジュが書いた手紙を見つけたのですが、社会主義に傾倒していたセルジュは、最初は革命に賛成で、喜んでいました。エリセーエフ家は、もともと貴族だったわけではありません。17世紀にはまだ貧乏で、その後商人となり、ビジネスを通して富を得てきた家系です。エリセーエフ家が貴族のタイトルを取得したのは、20世紀初めに、エミール・ルーベ大統領のロシア訪問の費用を全て出し、盛大におもてなしをしたことに対する謝儀です。豊かな暮らしをしていたけれど、典型的な貴族ではなかったし、ベルリン、ロンドン、東京と、世界を見たセルジュは、ロシアの皇帝、君主制を嫌っていたのです。セルジュの妻のペラも革命に賛成していました。もともとペラはセルジュの妹の数学の先生だったので、『使用人が主人の家族の息子を奪った』と評判が悪く、家族の間でも嫌な思いをしてきました。そのため、自由になれると信じ、革命を喜んでいました」(ダニエル談)

若い革命家たちの中には、ブルジョアの息子がたくさん含まれていたという。

「セルジュも含め、何ん自由なく暮らしていた人にとっては、一文無しになるということが想像できないのです。たとえ全てを失ったとしても、生きていけるというような、理想を抱いているのです。エリセーエフ家は、革命家たちを自宅に招き入れました。全部の部屋に人が埋まっ

ているくらい大勢の人がいたのですが、それでも地下倉庫にあった缶詰やワインなどの食料品で、3年間生き延びることができたといえますから、どれだけ膨大なストックがあったのか、お分かりになるでしょう。革命家たちは、新しいシステムでより良く生きていけると夢を見ていました」(ダニエル談)

しかしボルシェビキーの台頭により、エリセーエフ家は私有財産を没収され、さらには恐怖政治の元、エリセーエフは逮捕されてしまう。

「逮捕されたときのことは、セルジュからも、彼の妻のベラからも幾度も話を聞きました。セルジュは監獄に夏目漱石の本を持ち込み、読みふけていたようです。ベラは、セルジュを釈放するようにと、宝飾品など価値のある物を持って行き、交渉したそうです。一度は釈放されますが、またいつ逮捕されるか分からない。今度捕まったらもう財産がなくなってしまうということで、残りの宝飾品は逃亡費用に充てました。まずはフィンランドに逃げ、その後スウェーデンへ、最終的にパリに到着しました。フランスを逃ぐ先を選んでるのは、若いころからフランスにはバカンスなどで訪れたことがあったこと、幸せな思い出があったからだだと思います。当時、ロシアの貴族にはフランス語を話せる人が多く、セルジュも幼いころからフランス語を話していたので、言葉にも問題はありませんでした」(ダニエル談)

## 第2の人生を始めたパリ

1921年、パリに亡命者として定住することになったエリセーエフは、生きて行くためにはどんな仕事でもするつもりでいたという。

「そんなとき、日本で知り合った日本人の友達にメトロの中で偶然会ったそうです。その方は日本大使館に勤務されていて、その縁でセルジュは日本大使館の翻訳業をできることになったそうです」(ダニエル談)

その他にも、「Je suis partout」などの複数の雑誌にも日本についてのルポルタージュを寄稿し、生活費を稼いでいった。ただこの雑誌は極右の雑誌なので、生活のためといえども、だんだん遠ざかっていくようになったようだ。24年にはギメ博物館でも仕事を始めた。当時、夏目漱石や谷崎潤一郎、志賀直哉などはフランスではまだ知られていなかったもので、27年には日本文学家的な作品を訳すとともに、単行本に収め、出版した。29年にはパリ国際大学都市日本館の初代館長に就任。翌年にはソルボンヌ大学の高等研究院の講師となる。31年にはフランスに帰化する。

「フランスはセルジュの故郷となりました。セルジュは生涯、なぜロシア革命の矛先が自分に向いたのか理解できませんでした。自分の家を提供したり、自分は社会のために貢献したりしたはずなのに。セルジュは亡命後、二度とロシアに戻ることはありませんでした。セルジュの息子ヴァティムは、仏露文化交流の一環として行われた世界遺産の展示会のため、69年と70年にソ連を訪れました。それでも行くにあたり、フランスの外交官だという証明書を作るなど、神経質になっていましたよ。私もソビエト連邦軍が怖かった。よく覚えているのが、70年に家族でソ連を訪れたとき、ソ連の外務大臣が息子たちをつかみ、『お前たちは永遠にソ連の市民だ。私たちは兵隊のために男性が必要だ』と言われ怖い思いをしたことです。その後は日本や中国に行くときも、ソ連を経由することはありませんでした」(ダニエル談)

順調にパリでの生活の基盤を築いていった32年、アメリカのハーバード大学から東洋語学部の部長になってもらいたいという申し出があり、渡米する。結局エリセーエフは57年までハーバード大学に居ることになる。

## 息子との関係

一方、エリセーエフの息子、ヴァティムの生活は楽ではなかった。ヴァティムは後に考古学者となり、パリのセルヌスキ美術館の館長を務めることになるのだが、エリセーエフが渡米するとき、まだ13歳だったヴァティムはフランスの全寮制の学校に入ることになる。子供たちは休みのときだけアメリカに行く生活となった。

「夫ヴァティムは、父親のようになりたかったのだと思います。セルジュはとても輝いていましたから。ただ、私が思うには、セルジュは本当に立派な人ですが、息子にはとても厳しく、ある意味意地悪でした。37年か38年ごろ、バカロレアを取得したヴァティムは、



ニューヨークの旅に出るセルジュ(右)と息子のヴァティム(上)、ニキタ(左)(1936年)

父親のいるアメリカへ行き、日本学を学びたいと言ったのですが、セルジュからダメだ、会いたくないという手紙が戻ってきたそうです。これは私の愕然ですが、セルジュはライバルが欲しくなかったのだと思います。ヴァティムは長年この出来事を忘れていたようですが、彼が80歳ごろに戸棚の整理をしていて当時の手紙を見つけた。これを読んで、『どうして父親が子供にこんなひどい手紙を書けるのか……』とショックを受けていました。ヴァティムは父親に性格が似ていましたから、それがうまくいかない原因でもあったのかもかもしれません」(ダニエル談)



レジオンドヌール勲章司令官昇進時に、ヴァティムと妻、ダニエル(1999年初頭)

## 白旗でもダメなら裸で交渉

エリセーエフはアメリカでも順調にキャリアを築き34年にはハーバード大学の東洋語学教授兼ハーバード・イェンチン・インスティテュート所長に就任する。しかしその能力が今度は対日戦略のために使われるようになる。エリセーエフは第2次世界大戦中、アメリカ軍のために日本語や日本の文化、習慣を教えた。日本の友人のことを思うと戦争は辛かったに違いない。しかしエリセーエフは軍国主義には大反対だったという。

「セルジュがアメリカ人に教えたことが実った例を話しましょう。終戦後、日本が降伏したことを知らなかった日本の小さな島があり、そこはまだアメリカ軍に対して抵抗を続けていました。アメリカ兵は、この島に近づいて終戦を告げたいけれど、近づけば撃たれてしまう。キャプテンは、白旗を掲げてみるなど、あらゆる手段で話し合いを試みましたが、日本兵は攻撃し続けてくる。そこで1人の若いアメリカの兵士が、『エリセーエフ先生が、日本人は侍の魂を持っているので、相手が何も武器を持っていないければ攻撃しないと誓っていた』と言い、青年は武器を隠し持っていないことを証明するために衣服

を身に着けず裸で船に乗り、島に近づいて行きました。すると攻撃がやみ、無事に話し合いができたそうです。この男性は、私の記憶が間違っていないければ、後に日本研究者となるジョン・ホイットニー・ホールか、ドナルド・シヴリーだったと思います。

この話には続きがあり、セルジュの晩年、彼の元にある女性が訪ねてきました。子供がいない彼女は、東京裁判で有罪判決を受けた亡き夫の刀をセルジュに託したいというのです。前述の、ホールかシヴリーから、セルジュが最もふさわしいと言われたからだそうです。セルジュはもう自分の先が長くないことを分かっていたので、息子のヴァティムに受け取るように言いました。そのため、私たち夫婦は長い間、その刀を預かっていたのですよ」(ダニエル談)

## 晩年のエリセーエフ

戦後の56年、エリセーエフは再びパリへ戻り、その後は生涯パリに住み続けた。ただ長期に渡るアメリカ滞在から帰国したエリセーエフは、「まさに浦島太郎だった」という。



ハーバード大学を引退するセルジュ(1959年)

「ギメ美術館ですら、セルジュを覚えていなかったそうです。25年間、ハーバードで日本学の創始者として、皆から敬服される立場でしたから、晩年はとても寂しそうでした。私は、なぜ成功したアメリカで国籍を取らなかったのかと聞いたことがあります。すると「私はもう既に1回、ロシア国籍からフランス国籍へ変更している。だからもう変えることはできない」と言いました。例えば、私の息子は20年前からアメリカに住んでいて、アメリカ国籍を取りました。私の子供の世代は、自分にとって居心地のよい国の国籍を取るという考え方がありますが、当時は生まれ持った国籍を変えるというの、よくないことでした。そのため、アメリカ国籍は取らなかったのです。パリに帰国後も授業はしていたものの、自分の研究を精力的に続けてはいませんでした。晩年は体が不自由で車椅子だったため、自尊心が強かったセルジュは外へも出たがりませんでした」(ダニエル談)

最後に、長年真実を確かめたいと思っていた「第2次世界大戦で神保町や京都が焼き払われなかったのは、エリセーエフが標的を外すように伝えたから」という伝説の真相について伺った。

「セルジュたちがグループを作り、京都を破壊してはいけないということ、決定権のある者に伝えたということは聞きました。神保町については、私は知りません。ただセルジュは、これらのことについては話したがりませんでした。標的を外して守られた場所は確かにあれど、そのせいで焼き払われ、大量の死者が出た場所もありますから」(ダニエル談)

日本学といえば、エリセーエフの教え子でハーバード大学の教授や駐日アメリカ大使を務めた東洋史研究者、エドウィン・ライシャワーの方が知名度がある。ライシャワーに関する書籍は多いものの、エリセーエフについて書かれた本は、倉田保雄のものくらいで、ほとんど他に見つけることができない。しかし本格的な日本学を始め、世界に日本を広めたエリセーエフの人生は、語り継がれるべきものではないだろうか。(敬称略)

参考文献:  
倉田保雄「夏目漱石とジャパノロジー狂想曲」『日本学の父』  
門下のロシア人・エリセーエフ(近代文芸社)  
倉田保雄「エリセーエフの生涯 日本学の始祖」(中公新書)

## 「アムール」の背景

そもそも、なぜフランスは「アムール(愛)の国」なのだろうか？ フランスの歴史をたどっていくと、洗練された文化を築くのに恋愛が役を買っていた時代に行き当たる。12世紀、トゥルバドールと呼ばれる歌謡詩人たちの時代だ。彼らの詩のテーマは、領主の妻など既婚女性へのかなわぬ恋。これは後に騎士道恋愛(宮廷風恋愛)と名付けられ、騎士は身分の高い女性に恋する中で、その婦人に値する人間になろうと内面を磨き、深い知性と高貴な立ち振る舞いを身に付けた。その後17世紀の宮廷社会でも、既婚の貴婦人たちは夫以外の男性と恋に落ちるのが常であり、恋愛は宮廷文化の重要な位置を占めた。婦人たちをより美しくみせる装飾品、男女の会話をより豊かにする教養、社交の場に欠かせない豪華な食事など、すべて宮廷社会から生まれた。現在フランス文化としてもはやされているおしゃれなものは、この時に生み出されたもの。アムールの国フランスには、日本では考えられない恋愛の歴史が根付いていたのだ。

## 「アムール」と「愛」は同じ？

では、現代フランス人はどんな恋愛観を持っているのか。フランス語のamourは、日本語に訳すと「愛」。しかし、この言葉の間に温度差があるような気がしてならない。「昨日まで、人前でも『愛している』と言ってベタベタしていたカップルが、次の日には『もう好きじゃない』と言う姿をよく見る。日本人からすると、それは愛じゃないのではないかと感じる」と語るのは、フランス人と離婚を経験した日本人女性。

特に夫婦や家族間において、日本の「愛」は情に似た貢献的な愛情であり、必ずしも「愛」の要素を必要としない。しかしフランスで「アムール」は相手を思う、惚えるような感情を持つ。この感覚が人生にとって大切であり、それによって自分を高めていく。中世の騎士道恋愛の要素が高まっているのだ。

離婚後、元夫の兄弟に会うと、必ず新しい恋の状況を聞かれる。息子と一緒にいるだけで幸せだから、新しい恋をする気はないと言うと、げげんな顔をされる」。当然のごとく、元夫には新しい恋人ができていたという。

フランス人は個人主義と言われるが、これは決して1人であることを意味しない。他に流されない自分の意見を持ち、他人に依存せず自立した生活のできる人であることが、個人主義の大前提。そしてその個人は、もう1人の自立した個人を常に必要としている。

子供に対する扱ひ方も、日本とフランスでは大きく異なる。日本の子育てでは、「川の子」になって寝る姿に象徴されるように、子供が夫婦の間に入り、家庭の中心となる。一方フランスでは、赤ん坊の頃から「自立」を求め、一人部屋で寝る練習をさせる。また、生まれたばかりの赤ん坊をベビーシッターに預けて2人で出かけるなど、夫婦の時間を大切にすること。逆にこの夫婦の時間が保たれなくなると、日本人が想像する以上にそれを苦痛に感じるのが現実のようだ。日本人女性と離婚したフランス人男性は、「子供が生まれてから、僕は妻の2番目の存在、給料を家に持ってくるだけの存在になった気がした」と語る。

## 主婦の座がないフランス

子供がいてもパートナーであることを望むフランス文化の中で、なかなか理解されないのが「専業主婦」である。日本では家計を預かり、子供の教育も担当する「主婦」という座が確立されている。しかしフランス人を夫にもつ日本人女性は「初対面のフランス人女性に仕事を聞かれ、『主婦』と答えると必ず不満される」と言う。フランスの恋愛論を説いた「フランスには、なぜ恋愛スキャンダルがないのか？」(藤沢直子、早野いづみ著)の中で、フランスで「母性」という言葉が日本のような意味を持たないことが指摘されている。それによると、父権的なキリスト教が支配権を握った西欧では、「母なる大地」たるものの権威が消し去られ、「母の権威が失墜している伝統のもとでは、母であることは女が生きる拠り所にはならない」としている。以前、フランス人の友人が「(生後まもない)子供を実家に預けてだんなと旅行に行



くために母乳を止めた」と言い、驚いたことがある。日本では可能な限り母乳で育てるように推進されていることを話すと、「だから出生率が上がらないのよ」と呆れられた。あくまでも自分の人生を効率的に生き、子供のために自分の楽しみを犠牲にしない。そんな母親の姿があった。

## 以心伝心はあり得ない

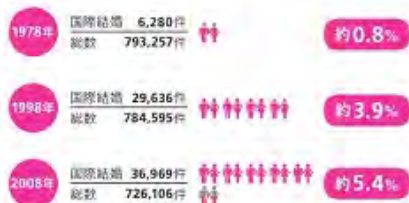
フランス人をパートナーに持つ日本人が口をそろえて言うのが「ここまで言わなくちゃ分からないのよ」と思う瞬間と、「ここまで言うか」と焦つて回数が多さについて。逆にフランス人と言わせると、「フランス人はもっと素直で嘘をつかない。日本人のパートナーが怒りをため込んでいても、爆発するまで気が付けない」そうだ。そもそも、日本語自体が相手の気持ちを考え、気持ちを察することを訓練させている。特別に意識せずとも幼い頃から言葉を選び、相手を傷つけないことが美德と考える日本人。それに対しフランス人は、知的な議論の場であったサロンの文化を持ち、自分の意見をはっきりと持ち発言することが大切だと教え込まれている。互いを理解するには、相手の言語と文化を知り、理解する努力が必要だ。

## もうひとつのフランス的結婚のかたち

連帯市民協約(PACS)とは、異性・同性問わず、共同生活をしようとする2人の成人が結ぶ契約のことで、1999年に施行された。それまでも結婚をせずとも法的に認知された形で共同生活を送ることができた Concubinage(同棲)という選択形はあったが、これは同性のカップルには認められていなかった。そのため PACS によって、同性愛者にも法的に認められた共同生活の形が広がった。結婚との最大の違いは、離婚に当たる契約解消手続きの容易さにある。離婚と違い、理由を問わず一方からの契約解除申請が可能だ。他にも、カップルの子として養子縁組ができないという違いはあるが、社会保障や共有財産などの優遇措置は結婚と同様。手続きは簡単で、2人の署名が入った契約書、未婚証明書、出生証明書を裁判所に提出し、認められれば成立する。フランス国立統計経済研究所(INSEE)によると、成立してからのこの10年間で交わされた PACS の件数は、約70万件にも及ぶ。結婚よりも PACS を選択するカップルは年々増加し、2008年は前年度比40%増、2009年はさらに20%増となっている。

## 結婚・離婚にみる日仏比較

### 日本の結婚総数における国際結婚率



### フランスの結婚総数における国際結婚率



### 日本の離婚総数における国際離婚率



# 離婚

年々増加している日仏カップルの結婚と離婚。その実態に迫る。

(Text: Kei Okishima)

## Divorce

### どちらの国の法律で離婚するか

国際離婚の場合、基本的に夫婦が離婚時に住んでいる国の法律が適用される。一人息子をフランスで育てる日本人女性 A さんは、イギリスでフランス人男性と結婚し、フランス、日本での生活を終えて日本で離婚した。手続は、「日本式で離婚したので“紙一枚”だった。しかしその後フランスに戻った A さんは、フランスで裁判をする。養育費などの権利をきちんと定めておいた方がよい、という箇面のアドバイスを受けてのことだった。

フランスと日本の離婚手続きは異なる。日本の場合、両者が離婚に同意している協議離婚の場合は役所に離婚届を提出するだけで離婚が成立する。しかしフランスでは、協議離婚でさえも弁護士を立て、裁判官による審理が必要だ。「フィガロ」紙によれば、平均で約 4 カ月、費用が 600～2000 ユロ掛かるという。

メリットもある。裁判所が関入するため、監視権や養育費の権利内容が離婚協議書内で確定しており、離婚後に養育費滞納などのトラブルが生じたときに解決を図りやすい。逆に日本で同様の問題が起きたとき、口約束で“紙一枚離婚”した場合には、家

庭裁判所に調停を申し立て、裁判官関与の下、解決を図るしかない。A さんが日本で離婚したにも関わらず、フランスで裁判を起こした理由はここにある。

### 親権に関する大きな違い

「日仏カップルで離婚するなら、フランスの法律で離婚することを勧める」と言うフランス人男性 B さんは、日本で結婚し、日本の法律で離婚した。B さんが現在抱える最大の問題は、一人娘との面会権だ。

子供の親権問題は、フランスと日本の離婚で大きく異なる。親権を母親か父親の一方に定めなくてはならない日本に対し、フランスでは両親の共同親権が原則。片方の親が子供と共に住める監理権を持ち、もう片方が定期的に子供と会える面会権を得る。しかし日本で離婚した B さんには親権がない。親権を持った元妻は、毎回なんらかの理由をつけ娘を会わせようとせず、ある時から B さんの連絡を完全に無視するようになった。その後の働き掛けにより連絡は取れたものの、離婚時には自ら拒否した養育費の要求や、面会の条件を一方的に突き付けられた。フランスのように法的な効力を持つ離婚協定書がないため、「何を今さら」と思いながらも身動きが取れない日々を嘆

く。「確かに良い夫ではなかったがもしれない。しかし良い父親であったことには間違いない。

夫の暴力が原因で離婚した実の妹と比較し、「フランスでは妻に暴力を振るった夫でも、子供に危害を加えなければ、面会権が得られる。なぜ自分が娘に会えないのか、余計に辛くなる」と打ち明ける。B さんは娘に会える可能性が少しでも高い日本を離れられず、1人日本で娘との再会できる日を待ち続ける。

国境を越えた離婚は、その後生じる問題をより複雑にする。国際離婚の場合には特に将来起こり得る問題を予測する必要がある。権利を法的に確定しておくことが重要だ。

### 子供を連れて帰れない日本人

フランスの法律で離婚した日本人はどうか。子供の親権は両方の親が持ち、外国人である日本人でも監理権を得ることは十分可能だ。ただしそれは、子供を育てられるだけの十分な経済的保障を示せ、離婚後もフランスに留まる場合である。フランスの裁判所は、フランスで育った子供にとって最良の選択は、同じ環境で生活し続けることだという判断を下す傾向があり、子供を連れて日本へ帰ることを認めないケースが目立つ。しかし現実には、フランス人のパートナーを失った日本人にとって、1人海外で子供を育てるのは容易ではない。まして、それまで専業主婦だった人や、フランスでの経済基盤を築けない人にとって、子供を連れて日本へ帰り、母国で一からやり直したいと考えるのは当然とも言える。これが子供の「連れ去り問題」を引き起こし、現在「国際的な子の奪取の民事面に関するハーグ条約」への加盟要請が各国からなされている。この条約は、離婚した夫婦の一方が親権を持つ他方の親に無断で自国へ連れ帰った場合に、元の国へ戻す手続きを規定したものだ。



ほとんどの先進主要国で批准されているが、日本はしていない。日本人でも、外国人の配偶者に無断で子供を連れ去られる被害に遭い、ハーグ条約加盟を求めるとある一方で、家庭内暴力など、連れ去らざるを得ない状況にある人に対する解決策、支援策はあるのか、そんな声も無視できない。日本の外務省はハーグ条約締結の可能性について検討を進める中で、国境を越えた子供の移動に関する問題について意見を募集している。当事者にしか見えない問題があるはずなので、条約が締結される前に意見がある人は述べてみてはどうだろうか。

外務省「国際的な子の奪取の民事面に関する条約(ハーグ条約)に関するアンケートの実施について」

[www.mofa.go.jp/mofaj/press/event/ko\\_haag.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/event/ko_haag.html)

経済的基盤が保障され、フランスに留まり子育てをすることができたとしても、親権が両者にある以上、面会や子供の進路など、何かと元妻・元夫と連絡を取り合わなければならない。相手が別の交際相手を見つけても、この国では当たり前のこと。異文化の問題を乗り越えて幸せになるには、これらの「起こり得る」問題を念頭に置き、解決策を事前に見出しおく必要があると思う。

### 離婚手続き・親権に関する日仏比較(協議離婚の場合)

	離婚成立にかかる時間 (2人の意思が一致した場合)	離婚費用	離婚協議書の作成	親権
日本 🇯🇵	最短 1日 (離婚届提出のみ)	弁護士を雇わない場合、無料	弁護士と相談の上作成可能。証拠書類としてのみ法的効力を持つ。	片親どちらか
フランス 🇫🇷	平均 4 カ月	600～2000€ (平均)	作成が義務。法的効力を持ち、養育費滞納の場合は給料差し押さえなどの処置が可能。	両親

### フランスにおける離婚件数



### 在仏日本大使館にて受理された婚姻・離婚件数(2008年)



● 家族や夫婦間でのトラブルに関する相談所(無料、要予約)  
Service de médiation et de consultation familiales  
47 rue Archereau 75019 Paris  
TEL: 01 40 38 63 95

● 権利に関する対応  
PAD Les Point d'accès au droit  
13, pl de Venétie 75013 Paris  
TEL: 01 55 78 20 56  
他、各都府にあり

● 法律に関する対応  
Maison de la Justice et du Droit  
vosdroits.service-public.fr/F1847.xhtml  
最新のセンターを検索できる

フランスでの結婚・離婚の手続きや必要書類については、在フランス日本国大使館ホームページに詳細が記載されています。  
[www.fr.emb-japan.go.jp](http://www.fr.emb-japan.go.jp)